イタリア語イタリア文学

◇教員◇

教授：土肥秀行

准教授：Lorenzo Amato

助教：長野徹

◇学生◇

学部：2 名、修士課程：2 名、博士課程：3 名

2025 年 4 月 1 日、研究室は「イタリア語イタリア文学」に改称した。とはいえ研究教育活動はこれまで通り継続される。学部と大学院の正式名称については要問合（ l_sel@l.u-tokyo.ac.jp ）。

〇本研究室の概要

国内では京都大学に次いで2番目、現時点で最新の、イタリア語イタリア文学に特化した研究室である。1979年、文学部に「イタリア語イタリア文学」研究室として設置され、1994年から2025年3月までの31年間は「南欧語南欧文学」と称した。目下、創設から半世紀となる2029年を目指し、研究室の再活性化を図っている。

現代のイタリア語を学ぶと、800年前に成立したダンテ『神曲』まで読めてしまうとまことしやかに言われるように、文学語の伝統の強さはイタリア文学の特徴のひとつである。古典の時代以降、各年代（ルネサンス、バロック、近現代）を代表する作家と作品によって、イタリア文学の伝統は力強く受け継がれてきた。それは明治中期以降、日本に積極的に紹介されてきたとおりである。イタリアの文学と文化の受容には、ヨーロッパやキリスト教の精神を知るため、同盟国間の文化理解を深めるためといった社会的・政治的意図がはたらいていたが、文学テクストをそれそのものとしてとらえようとするアプローチが、20世紀の後半になってようやく可能となってきた。その受け皿としての意義が本研究室に認められる。

現在は3名の専任教員（日本語母語者2、フィレンツェ出身のイタリア語ネイティブ1）、および5名（うちイタリア語ネイティブ1）の非常勤講師が授業を担当し、まずはイタリア語で書かれたテクストを正確に読解する訓

練を施す。それだけでなく、作文や会話の面でも現代イタリア語の運用能力がしっかり身に付けられるよう、カリキュラムを組んでいる。学生は各自の関心に従い、専任教員と協議しつつ、卒業論文のテーマを選ぶことになるが、その幅は、中世末の韻文からファシズム期以降の小説までと限りなく広い。毎年、平均では、教養課程から進学する者、学士入学する者、大学院に進む者、それぞれ1から2名である。学部卒業後の進路はさまざまであるが、大学院を修了したのち、研究職に就くだけでなく、翻訳業で活躍する者もいる。本研究室における研究活動は、紀要『イタリア語イタリア文学』に収斂する。この学術誌は、年1回発行、査読付き、伊語もしくは日本語での執筆が可能である。しばしば国内外の研究者が訪れては、夏季集中講義、講演会やシンポジウムを行っている。イタリア文学とはいえど、東アジア圏での連携をまずは研究者同士で図っていくことを近年の課題としている。

○イタリア語イタリア文学について

イタリア語は、ラテン語の故地で形成された言語だけあってラテン語の風格をよく保っている。最古文献の作成された年は西暦960年（モンテカッシーノ修道院の所領地をめぐる裁判記録の中に見いだされる）であり、フランス語の初出文献より120年ほど遅れるが、これは西欧中世の共通文語であったラテン語が、イタリア半島の文化に深く根づいていたためである。

イタリア語（俗語）を用いた文学作品は13世紀初頭より現われるが、同世紀末より14世紀にかけてダンテ（叙事詩）、ペトラルカ（抒情詩）、ボッカッチョ（散文）というイタリア文学史の最高峰をなす作家の輩出をみる。その背景に他の西欧諸国に先駆けてイタリアに興ったルネサンス運動のあったことはいうまでもない。トスカーナ地方出身のこれら三大作家の功績により、イタリア標準文語の実質的な形成が14世紀になされたことは特筆すべき事柄である。以後今日に至るまでイタリアの標準文語の基本的性格は大きくは変わっていない。

14世紀以後も、叙事詩（アリオスト等）、抒情詩（レオパルディ等）、劇詩（メタスタジオ等）、戯曲（ゴルドーニ等）、小説（マンゾーニ等）、批評（クローチェ等）、思想（ヴィーコ等）など、イタリア語を用いるあらゆるジャンルで活発な活動が展開されてきた。また、地方文化の多様性を特色とするイタリアでは、標準語と同じくラテン語から派生したとはい

え、標準語とは様相を異にする方言が全土で根強い生命を保っている。方言を用いた文学作品にもみるべきものが少なくない。

イタリア語は西ヨーロッパ文化圏において有数の豊饒さを誇る文学を生み出し、イタリア文学はその文化的先進性によって、他地域の文学に大きな影響を及ぼしてきた。イタリア語イタリア文学を学ぶことは、近代西欧文化の根底に触れ、その行き届いた理解を得る上で重要な契機となろう。

○イタリア語イタリア文学の授業について

講義を通して、できるだけ多様な作家・時代・ジャンルに触れられるようカリキュラムが組まれている。

講義を担当する専任教員2名（詳しくは後述）のうち、ネイティブ教員のロレンツォ・アマートが、実践的なイタリア語運用能力（話す、聞く、書く）を育むレッスンのみならず、専門のルネサンス文学における諸ジャンル（韻文・説話・評論文）それぞれについての講読授業を担当している。対象作家には、ダンテ、ボッカッチョ、ペトラルカがかならず含まれる。もうひとりの専任教員である、近現代文学を専門とする土肥秀行が、近現代のイタリア文学史を講じ、20世紀小説や前衛芸術における言語表現の講読を行っている。

非常勤講師の面々は、人文主義の中心に位置するアルベルティ（横田太郎）、18世紀の劇作家アルフィエーリ（大崎さやの）、19世紀最大の詩人レオパルディ（古田耕史）、初期レアリズム文学を代表するヴェルガ（倉重克明）といった、思想史・文学史上重要な文人を専門としており、授業でもしばしば扱う。くわえてイタリア語学を専門とする講師（土肥篤）が、イタリア語史と文学の関係を講じる。

○3名の専任教員の紹介

卒業論文と大学院生の研究に関して、専任教員が積極サポートを行う。

准教授のロレンツォ・アマートは、16世紀韻文を扱う文献学者として、未刊行の資料をアーカイブから掘り起こしている。過去には、フィンランド語フィンランド文学を母校のフィレンツェ大学で講じ、フィンランドのユヴァスキュラ大学ではイタリア語とイタリア文学を教えた経験をもつ。北欧から南欧までに広がる古典学の国際的な研究者ネットワークの一翼をなし、国際学会に定期的に参加、また国内でのシンポジウム開催を年に数

度催している。2025年10月から一年間、在外研究期間を予定している。

もうひとりの准教授の土肥秀行は、20世紀文学を中心に研究を行ってきた。なかでも映画で知られる詩人パゾリーニのフリウリ方言詩、日本の詩歌の影響で短詩形を試みたウンガレッティ、ヨーロッパ前衛のはしりである未来派の宣言文を扱ってきた。授業では、現代文学のほかに、日本であまり研究されることのないバロック文学、詩人マリーノを取り上げている。イタリア、アルゼンチン、アジアのイタリア研究者との連携を深めるシンポジウムやセミナー活動を行っている。

専任の助教である長野徹は、研究室運営に携わる一方、現代イタリア文学と児童文学の数多くの作品を訳してきた。ディーノ・ブッツァーティ『動物奇譚集』の訳業により、2023年に須賀敦子翻訳賞を受賞した。

〇進学を考えている人へ

進学者は、教養学部において、イタリア語の授業（初修クラスあるいは第3外国語初級・中級その他イタリア語関連の授業）を履修した人が中心となるであろうが、やる気さえあればイタリア語未習でも構わない。本研究室では、スペイン語やポルトガル語の授業も開講しているので、旺盛な好奇心でチャレンジしてもらいたい。またラテン語（できれば併せて古典ギリシャ語）の知識は、イタリア語との近さから、イタリア文学を理解するのに役に立つ。文学部では、多様な世界文学に浸るだけでなく、思想や歴史や社会学といった諸分野への無限な広がりを存分に味わう2年としてほしい。

少人数でなされることの多い授業は、学び甲斐があるだろう。教員側としては、できるだけ風通しのよい研究室運営により、様々な声があげやすくなるよう心掛けている。